は依正各具の曼荼羅なり。依正互に他を具足して一種子中に諸の技葉花果を具足するが如き不思議の法なるを依正各具の曼荼羅と云ふなり、行者一度曼荼羅を禮拜する時は、一念の當初能く是等六種の曼荼羅を供養する事を得るなり。（以下次號）

興師身延離山に付て

望月本啓

古來興師身延離山に付て諸多の說ありと雖も、其れ等は暫く置き、或派の師波木井公の謗法なるが故ありと云ふものに對し、少しく自己の信ずる所を述べむとす。

御書に曰く『同十七日波木井の鄕へ着きぬ波木井殿に對面せしかば大いに悅び今生は實長身の及ばん程はみつぎ奉るべし後生をば上人助け給へと契りし事は只事とも覺へず偏へに慈父悲母の波木井殿の身に入りかはり日蓮を哀み給ふか』と。波木井殿いかで此の誓を破り給ふべき、又曰く『次郎殿等の御公達親の仰せと申し我が心に入れてはします事なれば乃至一人も疎略の義あし』依て知んぬ、親子心に入れて御供養申せし事を。若し更に之れを疑ふ者は須く我執を捨てゝ考ふべし、宗祖其の始め御座所御選定に當り、諸方有力ある信徒の招待にも應じ給はず、特に此の地を撰み給ひし事を。若し波木井公の謗法は後年なるが故にと云はゞ、末法唱導師本化上行菩薩として九ケ年の長き間斯くの如き大事を知らずして過したりと云ふか、强いて之れを云はゞ蒙古豫言も妄語となるべし。一丈の堀を越へざる者二丈三丈の堀を超ゆべからざるが故なり。見よ、波木井殿御書には、『此人は無邊行菩薩の再誕にてやたはすらん』と又『此の山は天竺の靈山日域の比枝山にも勝れたり』と遊ばされたるを。無邊行菩薩何ぞ謗法をあされんや。地頭若し謗法あらば何ぞ勝れたりと宣せ給ふや。又御書に曰く『靈山の敎主釋迦寶淨世界の多寶如來十方分身の諸佛本化の大士迹化の菩薩梵釋龍神十羅刹女も定めて此の砌りに御座すら

ん乃至此の如く佛菩薩の住み給ふ功德聚の砌りな乃至無始の罪障も今生一世に消滅すべきか』と德孤ならず必らず隣ありとは外道尙之れを云へり、況や法華經の行者本化上行菩薩九ヶ年の永き歲月を費し一人の波木井公を敎化し能はざるの理あるべしや。法貴きが故に所貴し、所貴きが故に人貴しと。須彌山に近づく鳥たる波木井公金色ならずして夫れ何ぞや。若輪番を改めし事聖意に契はずとならば、何んぞ宗祖自ら默し給ひしぞ。盡未來までも心は身延山にすむべく候と宣ひしに非ずや若し栖神ましまさゞるが故と言はゞ、國主法華經を信ぜざれば、日本國中何れの所にも栖神ましまさゞるべきか、其の義あるべからず、

吾人は此の意によりて師の離山は波木井公謗法の故にはあらずして、何事か深き理由の存するものなる事を信ずると共に、宗祖滅後幾何ならずして六上足の相反目せりと云ふを疑ふ者なり。

佛敎に及べる上代印度の宗敎思想

荒木經明

佛敎が在來の宗敎に對して有する特色は、其信行の中心を佛陀の人格に在り而も其思想觀念の構成並に材料はヴェダに淵源して實在と生死と解脫の三點に集中せり。此三に關してヴェダ思想を明かにするは佛敎思想の基く所を明かにすると共に又其出藍の特色を辨別する所以なり、所謂佛敎は宗敎その者にして今日其勢力の實大なるは何が故ぞ、佛陀の宗敎は高貴に非ずして一般平民的にして、徒らに高遠に非ざると同時に佛陀の敎は人間向上の大道である故に『佛敎が當代及び爾後數千載の民衆に偉大なる感化を與へし所以の者は、佛陀の瞻仰すべき人格に因る事多くして、其敎義に因る事は寧ろ少しと爲す』とは東洋學者のマクスミュヲーの佛陀の讃美の言なり。